

〈研究報告〉

教育実習指導の評価および教職への意欲と
適性の自己評価に関する経年変化

— 体育学部・スポーツ科学部学生を対象として —

家田重晴* 埜子耕一* 小磯 透* 柿山哲治** 勝亦紘一***

Changes over Time to Students' Evaluations of Instruction for Teaching Practice and
Self Evaluations of Will and Aptitude for the Teaching ProfessionShigeharu IEDA *, Kouichi MOKUSHI *, Toru KOISO *,
Tetsuji KAKIYAMA **, Kouichi KATSUMATA ***

Abstract

This study investigated the changes over time to students' evaluations of instruction for teaching practice and their self-evaluations of will and aptitude for the teaching profession. Survey was carried out every other year between 2003 and 2015. The population comprised 2,259 students (1,432 male and 827 female) who had finished a teaching practice of health and physical education at the School of Health and Physical Education, C University. A sample of 2,103 students responded anonymously to a survey administered after their teaching practices were completed (93.1% response rate).

The main results were:

1. Students' evaluations of instruction for teaching practice

Concerning "As a Whole," affirmative answers were obtained from 72.0 % of the sample. A significant relationship with year was found such that; answers provided in the more recent years were slightly more positive than those provided in the earlier years. Regarding "Instruction on Health Teaching," answers in the more recent years were significantly more positive than those provided in the earlier years. The affirmative answers accounted 65.6% of the sample.

2. Relationships between students' evaluations of instruction for teaching practice and self-evaluations of will and aptitude for the teaching profession

Regarding "Self-evaluations of Will," less than 60.0 % provided affirmative answers in 2003 through 2007, which increased after 2009 to 65.5 % to 75.0 % . Answers in the more recent years were significantly more positive than were those in the earlier years. Concerning "Self-evaluations of Aptitude," 46.7 % of the sample reported affirmative answers. No statistically significant relationship to year was found.

Regarding both "Self-evaluations of Will" and "Self-evaluations of Aptitude," students who

* 中京大学スポーツ科学部、** 福岡大学スポーツ科学部、*** 中京大学名誉教授

provided affirmative answers tended to be significantly more affirmative on the evaluation of instruction for teaching practice, “As a Whole.

I. 緒言

これまで、C大学の体育学部教育実習履修者を対象として、実習授業に関する自己評価¹⁾、教職への意欲や教職適性の自己評価²⁾およびそれと授業実習との関連³⁾、保健授業の担当時間や担当分野⁴⁾、体育の「体づくり運動」等の指導内容⁵⁾、教育実習履修者の喫煙状況や教育実習校の敷地内禁煙の実施状況⁶⁻⁸⁾、に関して調査を実施してきた。しかし、教育実習指導に関する学生の評価⁹⁾については、20年以上前に報告して以来、調査結果をまとめていなかった。

ところで、FD（ファカルティ・ディベロプメント）とは、「学ぶ者が『ここで学べて良かった』と実感するとともに、確実に力をつけ、自信をもって社会に巣立っていけるような大学にすることを念頭に、教員（集団）＝Facultyが教育力を高め＝Develop、“より良い授業”、“より良い学習環境”を目指す取り組みを進めていくことを指している¹⁰⁾。本学においては、2001年に「FD小委員会」が生まれ、2003年12月に第1回の授業アンケートが実施された。そして、2004年からは「FD教育改革委員会」が出来て、アンケート、授業公開などFDに関する話を話し合ったり、学生との懇談会も実施したりしている¹⁰⁾。教育実習指導に関しては授業アンケートの対象とされなかったが、以前から教育実習事後指導において教育実習指導に関する簡単な評価を求めている。

そこで、本研究では、過去に遡って教育実習指導に関する学生の評価を調べ、どのような評価が得られていたのか、また経年的な変化があったのかを明らかにすることとした。さらに、教育実習指導の評価は、教職への意欲の強さや適性の自己評価の程度と関連しているかもしれないので、それらの関連についても検討を試みた。

II. 研究方法

1. 調査対象及び方法

調査対象者は、C大学体育学部およびスポーツ科学部（2015年度のみ）において保健体育科教育実習を履修した学生で、2003年度から2015年度まで1年おきに調査を実施した（表1参照）。対象者数の総合計は、2,259人（男子1,432人、女子827人）であった。

教育実習事後指導の際に無記名の質問紙調査を実施した。2003年度から2007年度までは前期教育実習履修者のみを対象とし、いずれも7月に調査した。しかし、2009年度以降については、3年生で教育実習に行った（主に後期に）小学校免許プログラム生^(注1)が含まれたので、7月に調査したほか、11月にそれらの3年生と後期実習の4年生に対する事後指導を行い、ここでも調査を実施した。なお、3年生の人数は、2009年度30人（男子14、女子16人）、2011年度31人（男子13、女子18人）、2013年度31人（男子16、女子15人）および2015年度29人（男子15、女子14人）であった。

回答は、2003年度から順に306人（男子194人、女子112人）、269人（男子168人、女子101人）、315人（男子206人、女子109人）、337人（男子199人、女子138人）、322人（男子203人、女子119人）、290人（男子169人、女子121人）、および264人（男子167人、女子97人）、全体で2103人（男子1306人、女子797人）から得られた。回答率は、2003年度から順に86.2%、87.6%、94.9%、96.0%、94.7%、96.3%、および96.7%、全体で93.1%であった。

2. 調査内容

「事前事後指導の内容等に関してどう感じたか」（全体として）（以下「全体として」とする）について、「良かった」～「良くなかった」の5段階で尋ねた。さらに、2007年度以降は、

これに加えて、「全体会について」、「体育授業の指導について」、および「保健授業の指導について」、同じ5段階で尋ねた(表2参照)。なお、「良かった」の5点～「良くなかった」の1点までの点数を付けた。

教職への意欲および適性(2007年度以降)についての質問項目を表3に示した。「教職につこうという意欲はあるか」については、「非常にある」～「全くない」の5段階で尋ねた。次に、「教職への適性があると思うか」につい

表1 調査対象者数¹⁾

		男子	女子	合計
2003年度(前期)	人数	231	124	355
	(%)	(65.1)	(34.9)	(100.0)
2005年度(前期)	人数	196	111	307
	(%)	(63.8)	(36.2)	(100.0)
2007年度(前期)	人数	220	112	332
	(%)	(66.3)	(33.7)	(100.0)
2009年度	人数	213	138	351
	(%)	(60.7)	(39.3)	(100.0)
2011年度	人数	218	122	340
	(%)	(64.1)	(35.9)	(100.0)
2013年度	人数	178	123	301
	(%)	(59.1)	(40.9)	(100.0)
2015年度	人数	176	97	273
	(%)	(64.5)	(35.5)	(100.0)
合計	人数	1432	827	2259
	(%)	(63.4)	(36.6)	(100.0)

注1) 対象者は全て、教育実習履修者であった。

表2 教育実習事前事後指導に関する質問項目

○事前事後指導の内容等に関してどう感じましたか。次のうちから選んで番号で答えてください。

	1. 良かった	2. 大体良かった	3. どちらとも言えない	4. あまり良くなかった	5. 良くなかった
1) 全体として
2) 全体会
3) 体育授業の指導
4) 保健授業の指導

表3 教職への意欲および適性に関する質問項目

○次の5段階から選んで番号で答えてください。

	1. 非常にある	2. かなりある	3. どちらとも言えない	4. ほとんどない	5. 全くない
1) 教職につこうという意欲はありますか。
2) 自分には教職への適性があると思いますか。

て、同じ5段階で尋ねた。いずれも、「非常にある」の5点～「全くない」の1点までの点数を付けた。

3. 教育実習指導

教育実習指導の概要は、表4のとおりである。指導は、全体で実施したり3つの班に分けて実施したりした。班別指導では、体育実技の指導や保健の模擬授業などを実施した。また、一例として、2015年度の事前事後指導の日程を表5に示した。

なお、事前指導については、2003年度～2007年度は、主に4月と5月に週1回の割合で実施したが、2009年度以降は、4月の春学期開講前に集中講義で実施した。

2009年度は、1コマのみ中学校実習の学生と高等学校実習の学生に分けて、指導をした。その際、中学校の方では、外部講師が道徳に関する指導をおこなった。また、2011年度以降は、保健授業のマイクロティーチングも新たに加え、体育実技の指導でも1コマにマイクロティーチングを取り入れることとした。さらに、2011年度以降は、保健の模擬授業の生徒役として、スポーツ科学部スポーツ教育学科の新入生に参加してもらった。

事後指導の全体会については、2007年度までは7月に1回設けていたが、2009年度以降は、3年生と後期実習の年4生のために、11月にも1回実施した。

表4 教育実習指導の概要

	担当者 ¹⁾		事前事後指導の日程 ²⁾⁻⁵⁾	回数
2003年度	勝亦、家田、 安田、青木、城山	事前 事後	4月～5月に週1回 6月に1回	9回
2005年度	勝亦、多湖、家田、 安田、青木、城山	事前 事後	4月～5月に週1回 6月と7月に1回ずつ	9回
2007年度	勝亦、多湖、家田、 青木、城山	事前 事後	3月にガイダンス、4月～5月に週1回 7月に1回	10回 ⁶⁾
2009年度	勝亦、多湖、家田	事前 事後	春学期開講前に集中講義 7月と11月に1回ずつ	13回
2011年度	家田、柿山、柰子 勝亦	事前 事後	春学期開講前に集中講義 7月と11月に1回ずつ	12回
2013年度	家田、柰子、柿山	事前 事後	春学期開講前に集中講義 7月と11月に1回ずつ	12回 ⁶⁾
2015年度	家田、小磯、柰子	事前 事後	春学期開講前に集中講義 7月と11月に1回ずつ	10回

注1) 担当者は、地区別指導の担当者を除いたものである。

地区別事前指導は、体育学部(スポーツ科学部)教員及び教養部(国際教養学部)教員が担当した。

2007年度から、教育実習校訪問のための現地指導特別講師の制度を始めた。

特別講師の方には、地区別事前指導の担当もお願いした。

注2) 2008年度から事前指導を集中講義で実施しており、2009年度は2年目であった。

注3) 2009年度から、小学校免許プログラム30人ほどが、3年生で中学・高校の教育実習に行くようになった。

注4) ここに示した他、別の日程で地区別事前事後指導をおこなった。

注5) 11月の事後指導は、小学校免許プログラムの3年生と後期実習の4年生を対象とした。

注6) ガイダンスを含めた回数である。

表5 2015年度 教育実習指導日程

1	4月1日(水)	411 教室	全体会(1):教育実習の意義、事前準備等について		
2	2~4限		全体会(2):指導日程について、学習指導案の作成、注意事項等		
3			全体会(3):実習記録の書き方、体験談、同和教育等		
			1班	2班	3班
			A・B・C・科目等履修生	D・E・F・3年小免生	G・H・I・J
4	4月2日(木) 2~4限		体育実技の指導A(小磯) 球技 (大体育館)	保健授業の指導A(家田) D・E(841教室) F・3年小免生(842教室)	体育実技の指導B(柵子) 体づくり運動 (レクリエーション体育館)
5			体育実技の指導B(柵子) 体づくり運動 (レクリエーション体育館)	体育実技の指導A(小磯) 球技 (大体育館)	保健授業の指導A(家田) G・H(841教室) I・J(842教室)
6			保健授業の指導A(家田) A・B(841教室) C・3年(842教室)	体育実技の指導B(柵子) 体づくり運動 (レクリエーション体育館)	体育実技の指導A(小磯) 球技 (大体育館)
7	4月3日(金) 10:50~ 12:40		保健授業の指導B(小磯) 学生の模擬授業 (2113教室)	保健授業の指導B(家田) 学生の模擬授業 (2122教室)	保健授業の指導B(柵子) 学生の模擬授業 (2123教室)
8	5月13日 (水) (昼休み)		地区別指導(1): 学校訪問担当教員による指導と日程の打合せ (現地指導特別講師担当地区の学生は、4月29日(水)の4限または5限に実施)		
	教育実習	各実習 校	6月の実施が多いが、地域や学校によっては、実習期間が後期のところや5月のところ、または7月に掛るところもある。		
9	7月1日(水) (昼休み)	研究室 等	地区別指導(2):学校訪問担当教員への教育実習の報告 * 現地指導特別講師担当地区・国際教養学部教員の担当地区の学生は、別日程で行う。 (後期の学生は、実習終了後、個別に担当教員に挨拶に伺うこと。)		
10	7月6日(月) 5限	431 教室	全体会(4)(4年前期実習生のみ対象):反省会、教育実習を振り返って、アンケート		
9	7月8日(水) (昼休み)	822 教室	地区別指導(2):教職担当教員への教育実習の報告 * 現地指導特別講師担当地区・国際教養学部教員の担当地区の学生対象		
11	11月16日 (月)5限	822 教室	全体会(5)(4年後期実習生、3年小免プログラム生全員):反省会、教育実習を振り返って、アンケート		

4. 分析方法

各々の質問項目と年度の関連および教育実習指導の評価と教職への意欲・適性の関連についての分析には、順位相関係数のケンドールのタウbを用いた。統計的有意水準は危険率5%未満とした。データの分析には、IBM SPSS Statistics 22を使用した。

III. 結果

1. 教育実習指導の評価

1) 全体として(教育実習指導に対する総合評

価)

総合計では、「良かった」が29.0%、「大体良かった」が43.0%、これらの2つを合わせた肯定的な評価が72.0%であった。

「あまり良くなかった」、「良くなかった」を合わせて4段階にした回答の経年変化をみると(図1)、「良かった」が一番高率だったのは2005年度の36.1%で、次いで2009年度の35.6%であった。次に「良かった」と「大体良かった」の合計では、2009年度(81.9%)が一番高率で、2003年度(58.2%)が一番低率

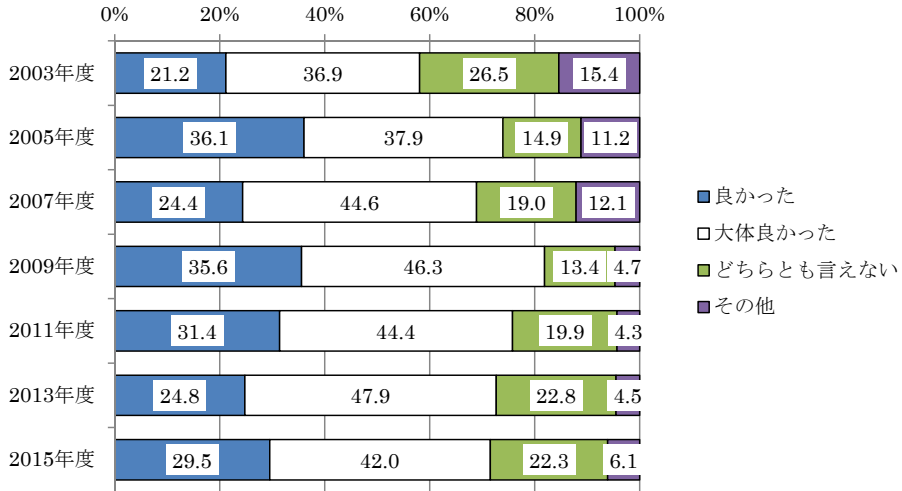


図1 学生による教育実習指導の評価（全体として）の経年変化

であった。なお、「良くなかった」は、古い年度から順に5.5%、3.0%、2.2%、0.9%、1.9%、1.7%、および1.1%であった。

全体では、後の年度の方の評価がやや良いという傾向であった（ $\chi^2 = 0.054$, $p < 0.01$ ）。

2) 全体会

「全体会」についての評価の2007年から2015年度までの経年的な変化を表6に示した。総合計では、「良かった」（5点）が26.5%、「大体良かった」（4点）が44.6%、これらの2つを合わせた肯定的な評価が71.1%であった。

表6 教育実習指導の評価（全体会）の経年変化

年度	全体会					人数(%)
	5点	4点	3点	2点	1点	合計
2007年度	60 (19.1)	143 (45.5)	78 (24.8)	26 (8.3)	7 (2.2)	314 (100.0)
2009年度	122 (36.2)	143 (42.4)	52 (15.4)	15 (4.5)	5 (1.5)	337 (100.0)
2011年度	85 (26.5)	141 (43.9)	73 (22.7)	15 (4.7)	7 (2.2)	321 (100.0)
2013年度	66 (22.8)	140 (48.3)	70 (24.1)	10 (3.4)	4 (1.4)	290 (100.0)
2015年度	72 (27.3)	114 (43.2)	55 (20.8)	17 (6.4)	6 (2.3)	264 (100.0)
合計	405 (26.5)	681 (44.6)	328 (21.5)	83 (5.4)	29 (1.9)	1526 (100.0)

注) 5点:良かった、4点:大体良かった、3点:どちらとも言えない、
2点:あまり良くなかった、1点:良くなかった

「全体として」の評価とかなり類似していたが、「良かった」(5点)は2009年度を除いて、「全体として」よりもやや低い比率となっていた。年度と評価との関連は有意でなかった(タウ $b = 0.013$, n.s.)。肯定的な評価が一番高率だったのは2009年度の78.6%で、一番低率だったのは2007年度の64.6%であった。2009年度では、「良かった」(5点)の比率が他の年度よりも約10%も高かった。なお、直近の2015年度とその前の2013年度も、肯定的な評価がいずれも70%強に上っていた。

3) 体育授業の指導

表7は「体育授業の指導」に関する評価の経年的な変化である。総合計では、「良かった」(5点)が26.6%、「大体良かった」(4点)が41.2%、これらの2つを合わせた肯定的な評価が67.8%であった。年度と評価との関連は有意でなかった(タウ $b = 0.034$, n.s.)。2009年度は、「良かった」(5点)が39.8%で、他の年度に比べて突出して高率であった。また肯定的な評価でも74.2%で一番高率あった。肯定的な評価が一番低率だったのは、2007年度の54.9%であった。なお、直近の2015年度とその前の2013年度も、肯定的な評価がいずれも70%強に上っていた。

4) 保健授業の指導

総合計では、「良かった」が24.2%、「大体良かった」が41.4%、これらの2つを合わせた肯定的な評価が65.6%であった。そして、「どちらとも言えない」が24.0%、「あまり良くなかった」が8.2%、「良くなかった」が2.2%であった。これは、「体育授業の指導」に関する評価とかなり類似していた。

図2に、保健授業の指導に関する評価の経年変化を示した。なお、ここでは、「あまり良くなかった」と「良くなかった」をまとめている。肯定的な評価が一番高率だったのは2015年度の72.8%で、次いで2013年度の69.9%、一番低率だったのは2007年度の51.4%であった。「良くなかった」は、古い年度から、2.9%、2.4%、2.8%、1.4%、および1.1%であった。全体として、後の年度の方が、いくらか評価が良い傾向であった(タウ $b = 0.097$, $p < 0.01$)。なお、「良かった」だけを見ると、2009年度が33.5%で特に高率であった。

2. 教職への意欲および適性に関する自己評価

1) 教職への意欲

「教職につこうという意欲はあるか」について

表7 教育実習指導の評価(体育授業の指導)の経年変化

体育授業 年度	人数(%)					合計
	5点	4点	3点	2点	1点	
2007年度	64 (20.3)	109 (34.6)	91 (28.9)	38 (12.1)	13 (4.1)	315 (100.0)
2009年度	134 (39.8)	116 (34.4)	67 (19.9)	16 (4.7)	4 (1.2)	337 (100.0)
2011年度	76 (23.6)	146 (45.3)	68 (21.1)	24 (7.5)	8 (2.5)	322 (100.0)
2013年度	71 (24.5)	134 (46.2)	56 (19.3)	25 (8.6)	4 (1.4)	290 (100.0)
2015年度	62 (23.5)	125 (47.3)	58 (22.0)	15 (5.7)	4 (1.5)	264 (100.0)
合計	407 (26.6)	630 (41.2)	340 (22.3)	118 (7.7)	33 (2.2)	1528 (100.0)

注) 5点:良かった、4点:大体良かった、3点:どちらとも言えない、
2点:あまり良くなかった、1点:良くなかった

ては、全体では「非常にある」が43.1%、「かなりある」が23.0%、「どちらとも言えない」が23.9%、「ほとんどない」が7.6%、「全くない」2.4%であった。

「教職につこうという意欲はあるか」については、「非常にある」、「かなりある」、「どちらとも言えない」～「全くない」の3段階で、経年変化を示した(図3)。「非常にある」の比率

が、2003年度から2007年度では、28.5%～37.5%であったのに対して、2009年度以降では、44.7%～54.8%と、20%程度も高くなっていた。また、肯定的な回答の比率でも、2007年度まではいずれも60%未満であったのに対して、2009年度以降では、3分の2から4分の3に増加していた。後半の年度の方が教職への意欲が有意に強い傾向が見られた(タウb =

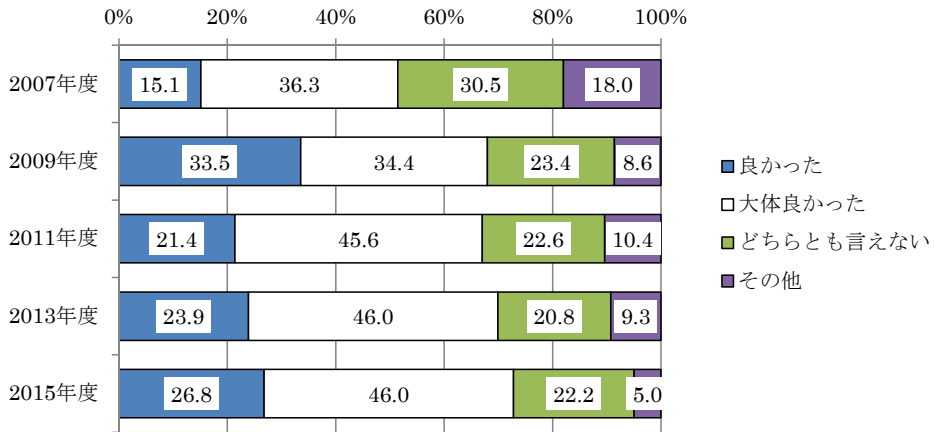


図2 学生による保健授業の指導の評価の経年変化

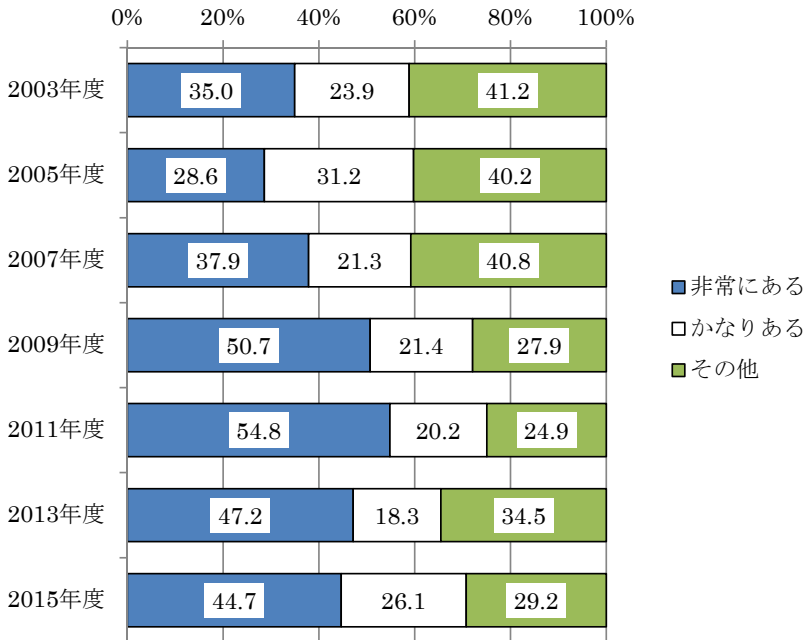


図3 教職への意欲に関する自己評価の経年変化

0.157, $p < 0.01$ 。

2) 教職への適性

「教職への適性があると思うか」については、全体では「非常にある」が18.9%、「かなりある」が27.8%、「どちらとも言えない」が44.4%、「ほとんどない」(2点)が6.8%、「全くない」2.1%であった。

「ほとんどない」～「全くない」を1つにまとめて、4段階で経年変化を示した(図4)。「非常にある」の比率は、2011年度の21.1%が一番大きく、2005年度の15.7%が一番小さかったが、全体にほぼ同程度であった。「非常にある」と「かなりある」を合わせた肯定的な回答の比率でも、一番低いのが2005年度の40.8%、一番高いのが2009年度の50.4%、次いで2011年度の49.4%で、違いはそれ程大きくなかった。年度による変化は、有意ではなかった。(タウ $b = 0.001$, n.s.)。

3. 教育実習指導に対する評価と教職への意欲・適性の自己評価との関連

1) 教職への意欲との関連

教育実習指導に対する総合評価(全体として)と教職への意欲(いずれも3段階)の関連についての結果は、図5のとおりであった。「良かった」の回答は、教職への意欲の「非常にある」者が31.5%、「かなりある」者が25.6%、その他の者が23.3%であった。教職への意欲の強い者の方が、教育実習に対する総合評価に関して有意に肯定的な回答をしていた(タウ $b = 0.076$, $p < 0.01$)。

2) 教職への適性との関連

図6に教育実習指導に対する総合評価(全体として:3段階)と教職への適性(4段階)の関連について示した。「良かった」の回答は、教職への適性の「非常にある」者が37.6%、「かなりある」者が29.2%、「どちらとも言えない」者が25.7%、その他の者が26.3%であった。教職への適性のあるとする者の方が、教育実習に対する総合評価に関して有意に肯定的な回答をしていた(タウ $b = 0.075$, $p < 0.01$)。

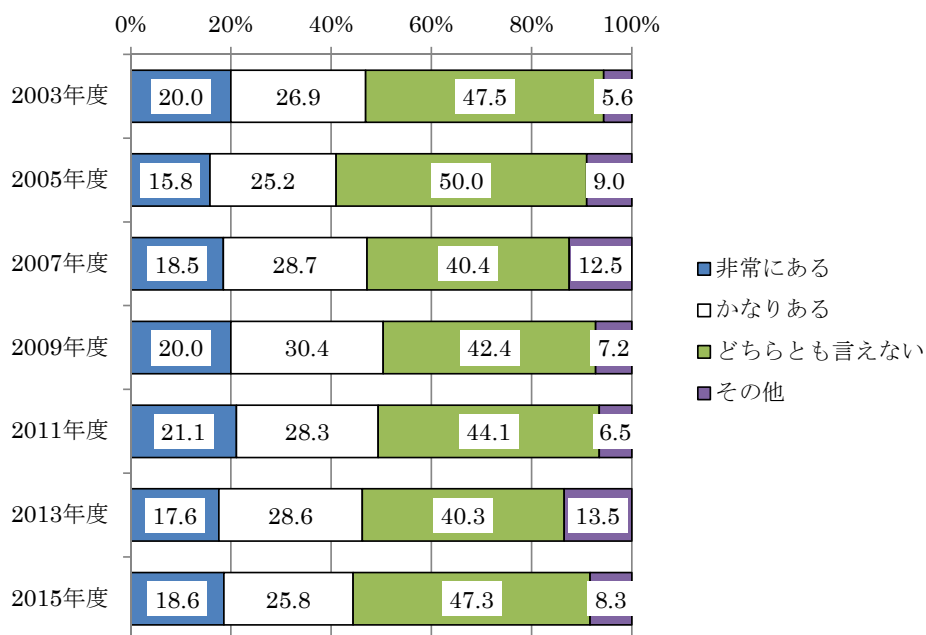


図4 教職への適性に関する自己評価の経年変化

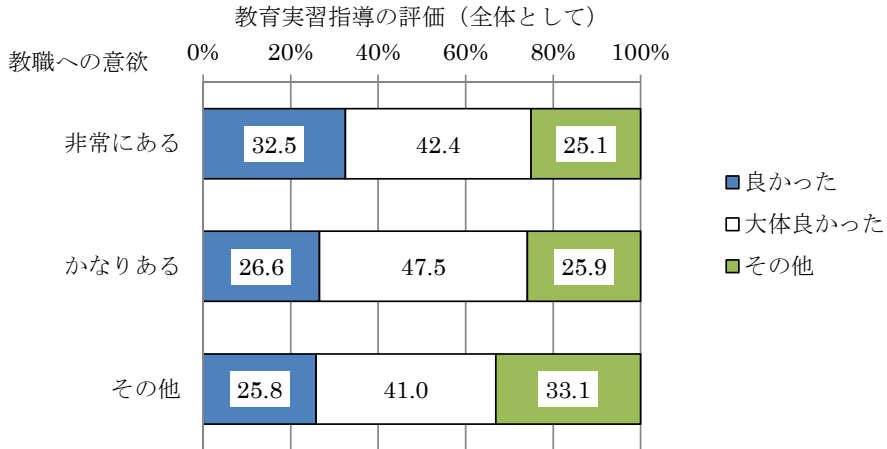


図5 教育実習指導の評価（全体として）と教職への意欲

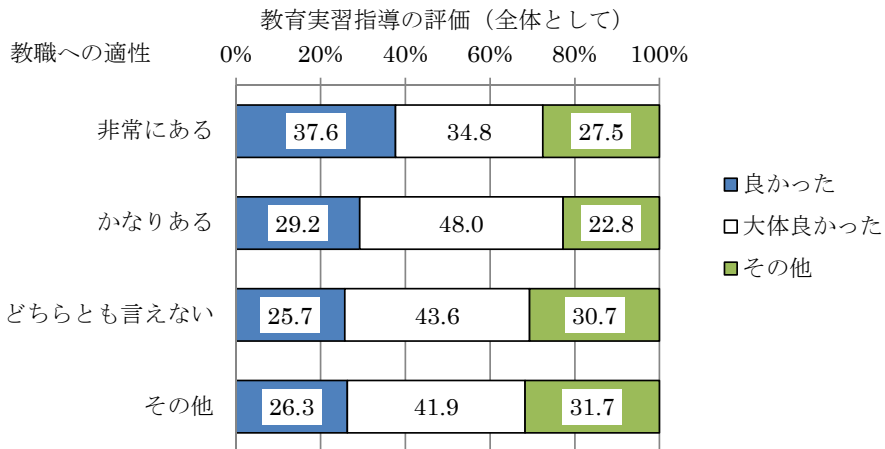


図6 教育実習指導の評価（全体として）と教職への適性

IV. 考察

事前指導については、2003年度～2007年度は、主に4月と5月に週1回の割合で実施したが、2008年度以降は、4月の春学期開講前に集中講義で実施しており、2009年度はその2年目であった。また、2009年度以降は11月にも事後指導の全体会を実施した。

教育実習指導（全体について）の学生の評価が、2009年度以降に特に否定的になる様子は見られず、むしろ後の年度の方が、評価が僅か

に肯定的だという傾向があった。また、2009年度以降では、否定的な評価が4.4%～6.0%で、非常に少なくなっていた。これらのことから、事前指導を4月の春学期開講前に集中講義で実施する方式については、特に問題がないと考えられた。

2005年度において「良かった」という回答が全ての年度の中で一番高率だった理由は、本研究における調査結果からは明らかにならなかった。しかし、この年度における授業の変化としては、C大学附属高校の校長を務めた教育経験の豊かな教員が教育実習指導に加わったこ

とがある。したがって、そのこと自体による新規性効果や実際に教育現場の情報が伝えられたことなどにより、授業評価が高くなった可能性が考えられる。どのような要素が教育実習指導の授業評価を高めるのかについて、さらなる検討を深める際には、このような変化も勘案する必要があるだろう。

次いで「良かった」という回答の比率が高かったのは2009年度であった。また、2009年度では、肯定的な評価も80%強に上っていた。この2009年度は、小学校免許プログラムの1期生が3年生で中学・高校の教育実習に出かけた年であった。2009年度は、教職への意欲についても「非常にある」者の比率が、2011年度年度とともに大きかった。小学校免許プログラム生が引張って、全体的に充実した学びができたことが、教育実習指導への高い評価につながったのではないかと考えられる。

また、2011年度も肯定的な評価が4分の3程度であったが、2011年度では保健授業のマイクロティーチングも新たに加え、体育実技の指導でも1コマにマイクロティーチングを取り入れ、さらに2011年度から、保健の模擬授業の生徒役として、スポーツ科学部スポーツ教育学科の新生に参加してもらった。これらの試みが評価に良い影響を与えた可能性が推測された。

付け加えると、教育実習指導については、教科書に関する工夫をしたり、教育実習での体験を「教育実習報告書」にまとめたりするなどの試みをしてきた。

まず、1994年度から2006年度までは、教科書として「保健体育科の教育実習」というB5版の50ページほどの冊子を用いていた。この冊子には、「教育実習記録」の記入例を入れていた。次に2007年度～2011年度は、「保健体育科 教育実習の手引」という75ページほどの冊子(A4版)を用いた。そして2012年度からは、内容を精選して「教育実習指導資料集」という45ページ程度の冊子(A4版)に変更し、さらに「教育実習記録」の記入例を復活させた。また、2013年度からは、この冊子

を教育実習履修者に無料で配布した。

さらに、2009年度から、学生に書かせたA4サイズ1枚の報告書から35人分ほどを選んで、「教育実習報告書」の冊子を作成し、2010年度の教育実習履修者から無料配布を始めた。なお、「教育実習報告書」には、実習期間や担当した題材(保健と体育の別に)の他、次のような事柄が書かれていた。すなわち、①授業の題材と時間、②事前準備や教材研究で工夫したこと、③授業で工夫したこと、④最も印象に残ったこと、⑤後輩に伝えておきたいこと。

教育実習指導の教科書や「教育実習報告書」が学生の評価に影響を与えているか不明なので、これらに関する評価も尋ねた方がよいかもわからない。

なお、過去に1985年度から1993年度まで毎年、教育実習指導についての学生の評価を調べたことがあるが、肯定的な評価は64.9%～86.1%で、平均75.7%であった⁹⁾。また、「良かった」が44.1%に上った年度もあるなど⁹⁾、本研究の結果に比べて、やや良い評価だったように思われるが、本研究の調査では、学生がFDの授業評価をするようになってきているため、以前よりいくらか厳しい評価をしていることも考えられる。

次に、保健授業の指導に関する評価が、後の方の年度で若干良くなっていることについては、模擬授業に加えてマイクロティーチングを導入した効果ではないかと考えられる。短い時間ではあるが全員が保健授業を実施する機会を持てたので、授業の提出資料でも勉強になったという意見がかなりあった。しかし、マイクロティーチングに関しては、今後、実施後の感想・意見を詳しく検討することなどが必要であろう。

なお、3年次の「保健科教育法I」において提出させた指導案レポート(グループレポート)をCD-ROMにして、2011年度から2014年度まで教育実習指導の際に配布¹²⁾したり、教育授業で実施した体育と保健の研究授業の学習指導案をファイルで提出させ、それを2013年度からWebを利用した教育支援システムに

掲示して教育実習履修者が利用できるようにしたりした。これらの試みも、学生の評価にいくらか良い影響を与えたかもしれない。

教職への意欲については、後の方の年度で「非常にある」者がやや高率であったが、愛知県等における教員の退職者の増加もあって、教員採用試験の現役合格者が増えて行ったことも関連していると考えられた。教職への適性に関する自己評価は、2003年度から2015年度まで、あまり変化が認められなかった。主観的には教職への適性のある学生が増えているように感じるが、学生は他の学生との相対的な位置づけで自己評価をしているために、あまり変化がなかったのではないか。

なお、教職への意欲と適性の自己評価に関しては、1995年度と1997年度に調査したことがあるが、その際、「教員志望の意欲」は、合計で、「すごくある」26.1%、「かなりある」29.1%、「普通くらい」26.5%、「多少はある」13.9%、「全くない」4.2%であった²⁾。選択肢が少し異なるので単純な比較はできないが、本研究では、「非常にある」が43.1%、「かなりある」が23.0%であったことから、本研究の対象の方が、やや意欲が強かったように思われた。また、以前の調査では「教員適性の評価」については、合計で、「すごくある」8.7%、「かなりある」24.0%、「普通くらい」43.9%、「多少はある」18.1%、「全くない」5.4%であった²⁾。本研究では、全体では「非常にある」が18.9%、「かなりある」が27.8%、「どちらとも言えない」が44.4%といった結果であり、いくらか評価が良いようにも見えるが、大きな差ではなかった。

最後に、教育実習指導に対する総合評価（全体として）と教職への意欲および教職への適性との関連を調べたところ、教職への意欲が強い者および教職への適性があるとする者の方がやや肯定的な評価をしていた。教職に対してより真剣に考えている者の方がより肯定的であったことは好ましいことであるが、これらの者の方が指導する立場の難しさをより感じていて、若干好意的に評価したという面があったかもしれ

ない。

V. 結語

1. 教育実習指導に対する総合評価（全体として）は、総合計では、「良かった」が30%弱、「大体良かった」が40%強、これらの2つを合わせた肯定的な評価が70%強であった。年度との関連では、後の方の年度で肯定的な回答がわずかに多いようであった。
2. 「全体会」、「体育授業の指導」、および「保健授業の指導」の評価について、2007年度以降の5つの年度について分析したところ、「全体会」および「体育授業の指導」については、回答にあまり大きな変化はなかった。しかし、「保健授業の指導」については、後の方の年度で少し肯定的な評価が多い傾向であった。
3. 教育実習に対する総合評価（全体として）と教職への意欲および教職への適性との関連を調べたところ、いずれに関しても、教職への意欲が強い者および教職への適性があるとする者の方がやや肯定的な評価をしていた。
4. 2008年度以降に実施している事前指導を4月の春学期開講前に集中講義で行う方式については、特に問題がないと考えられた。
5. 今後、教育実習指導の教科書や「教育実習報告書」についても、学生の評価を求める方が良いかもしれない。

謝辞

質問紙調査に答えていただいたC大学体育学部・スポーツ科学部の教育実習履修者の皆さんに深く感謝します。また、教育実習指導を担当していただいた先生方に心からお礼を申し上げます。

注釈

- 注1) 小学校免許プログラム生は、中学校・高等学校教諭の免許を基礎免許として、他大

学と提携して通信教育で小学校教諭免許の取得をめざしている学生であり、中学校または高等学校の教育実習を3年次の前期または後期に行い、小学校の実習を4年次後期に行うことになっている。

参考文献

- 1) 家田重晴、勝亦紘一、田川則子：保健体育科の教育実習生の授業に関する構造的分析. 学校保健研究 35 (12) : 599-610、1993
- 2) 平井佐紀子、新井猛浩、家田重晴、中川武夫、勝亦紘一：保健体育科教育実習生の教員志望、適性評価等の分析. 中京大学体育学論叢 40 (1) : 63-83、1998
- 3) 柰子耕一、新井猛弘、柿山哲治、家田重晴：教職適性の自己評価に与える教育実習の保健及び体育の授業実習の影響. 中京大学教師教育論叢 1 : 1-10、2012
- 4) 大窄貴史、吉田博紀、家田重晴、勝亦紘一：保健体育科教育実習における保健授業の担当時間及び担当分野について. 中京大学体育学論叢 46 (2) : 99-113、2005
- 5) 大窄貴史、六鹿由紀、家田重晴、勝亦紘一：中学、高校の体育授業における「体づくり運動」等の指導内容. 中京大学体育学論叢 47 (1) : 1-13、2006
- 6) 家田重晴、勝亦紘一、大窄貴史、白井若菜、斎藤禎一：大学のタバコ対策と教育実習履修者の喫煙習慣等の関連. 学校保健研究 45 (1) : 30-42、2003
- 7) 谷なお子、大窄貴史、家田重晴、勝亦紘一：保健体育科教育実習履修者の喫煙状況及び実習校の敷地内禁煙実施状況等について. 中京大学体育学論叢 46 (2) : 115-124、2005
- 8) 柿山哲治、柰子耕一、家田重晴、勝亦紘一：保健体育科教育実習履修者の喫煙率の変化について - 2007年度から2011年度までの結果 - . 中京大学体育学論叢 53 (2) : 23-29、2013
- 9) 勝亦紘一、家田重晴、田川則子：保健体育科の教育実習に関する研究 (5) 教育実習指導に対する学生の評価と要望. 中京大学体育学論叢 35 (2) : 59-73、1994
- 10) FD NEWS No.8 学長インタビュー特集号、2014
http://www.chukyo-u.ac.jp/information/pdf/fd/news2014_11.pdf
アクセス日 2016年3月8日
- 11) 柿山哲治、柰子耕一、家田重晴：保健体育科教育実習における「保健」授業の実態調査 - 2013年度春学期における検討 - . 中京大学体育学論叢 55 (1) : 49-60、2014